

ウェイド式ローマ字のそり舌音 - - 満洲文字表記との類似

中村雅之

1. 問題点

トマス・ウェイドのローマ字表記はかつて中国語の表記として世界中で用いられたものであるが、その表記はかなり独特である。とりわけ問題となるのはそり舌音(ピンインのzh/ch/sh)と舌面音(ピンインのj/q/x)の表記上の区別で、おおむね次のような構成になっている。

ピンイン	zh	j	ch	q	sh	x
ウェイド	ch		ch'		sh	hs

つまり、破擦音ではそり舌音と舌面音を区別しないが、摩擦音では明瞭に区別する。例えば、「章」と「将」は、ピンインでは「zhang」と「jiang」であるが、ウェイド式では「chang」と「chiang」になる。一方、摩擦音では表記を区別し、ピンインの「x」にあたる舌面音は「hs」で表記される。「商」と「相」はウェイド式ではそれぞれ「shang」と「hsiang」である。このような不均衡な表記体系はいかにして生まれたのであろうか。

2. 満洲文字表記

清代の満洲文字による漢語表記も、次のようにウェイド式ローマ字とよく似た状況にある。(満洲文字はローマ字転写で示す)

ピンイン	zh	j	ch	q	sh	x
満洲文字	j		c		š	s

「章」と「将」は満洲文字表記ではそれぞれ「jang」「jiyang」となり、「商」と「相」はそれぞれ「šang」「siyang」となる。

さらに、興味深いことに、ピンインの「zhi」「chi」にあたる表記にもウェイド式と満洲文字に類似性が見られる。「知」「吃」のウェイド式表記はそれぞれ「chih」「ch'ih」であるが、これは舌面音の表記「chi」「ch'i」(ピンインの「ji」「qi」)に「h」を加えたもので、結果として「-ih」がそり舌母音を表記しているように見えている。一方、満洲文字表記では、やはり舌面音の表記「ji」「ci」の字形の右側に「」を加えて「知」「吃」の音を表記している(「jy」「cy」と転写されることが多い)。つまり、ピンインを使ってその関係を表せば、ウェイド式も満洲文字も同様

に、「ji + zhi」「qi + chi」という構成である。

3. 解釈

上に見たウェイド式と満洲文字との表記上の類似をどのように解釈すべきであろうか。満洲文字の表記法がウェイド式ローマ字に影響を与えた結果なのか、それとも偶然の一致なのか。まず、それぞれの文字組織に上述のような区別および不区別をもたらす要因があるかどうかを確認しておく必要がある。

漢語には歯茎や硬口蓋で調音する破擦音・摩擦音が豊富に存在するが、それに対応させられる満洲文字はもともと「j」「c」「s」の3種のみであった。問題のそり舌音と舌面音について見ると、破擦音の「j」「c」に関しては結合する韻母が完全な相補分布をなす。それゆえに「j」「c」はそり舌と舌面の両方の表記に用い、後続の韻母が直音であればそり舌音、拗音であれば舌面音を表すことにした訳である。しかし「s」に関しては、「三(ピンインsān)」と「山(ピンインshān)」のような対立が存在することから、「s」に一画を足して、新たに「ś」というそり舌専用の表記を考案せざるを得なかった。その結果、そり舌は「ś」、舌面は「si-」という表記が形成された。つまり、摩擦音のみにそり舌音と舌面音の表記の区別があるのは、満洲文字という文字組織においては必然のものであったと言えるのである。

一方、ウェイド式ローマ字における状況はどうか。実は、このローマ字表記では、「sh」という表記を(「ch」「ch'」のように)そり舌音と舌面音の両方に用いることは可能であった。というよりも、「商」の「shang」に対して、「相」を「shiang」と表記した方が表記上の一貫性があると言える。つまり、ウェイド式ローマ字においては、摩擦音の表記だけがそり舌音と舌面音の区別をもつ理由がないのである。

以上を勘案すれば、ウェイド式におけるそり舌音と舌面音の奇妙な表記は、何らかの形で満洲文字表記の影響を受けて成立した可能性が高いと言える。ただし、そり舌音「sh」と対立する舌面音に「hs」という風変わりな表記を考案した点については、満洲文字の影響を離れて別に検討すべき問題である。